

SRID NEWSLETTER

No.299 SEPTEMBER 2000 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

「2000年度リレー討論」

熱帯林危機とIT（情報革命）

佐藤雄一（インドネシア農林省）
syuichisat@aol.com

一年ぶりの一時帰国。日本に帰ると日経が好きなので散歩がてら毎朝駅の売店で買うのだが、紙面にはほとんど毎日といっていいほどIT（情報革命）という言葉が飛び交っている。インドネシアでもときたまこの言葉を目にしたが、IT情報の嵐に少しショックを受けた。インドネシアに再赴任する間にSRID恩師の辻岡さんからITについて投稿してほしいとの嬉しい電話をいただき、いろいろ考えたが自分の協力分野から考えてみた。

ご承知のとおり、インドネシアはブラジルに次いで広大な熱帯林を持つ国の一つである。東カリマンタンに代表される樹高70mを越えオランウータンの生息する典型的な熱帯降雨林、中央カリマンタンやスマトラ東部に広がりトラの生息する湿地林、各島の海岸線沿いに残り水産養殖も盛んなマングローブ林、スマトラやイリヤンジャヤの中央部に広がり裸の狩猟採取民が現在も昔ながらの生活を営む山地林など、さまざまなタイプをもつ貴重な森林生態系と、これに依存した世界で最も高い生物多様性を持つ熱帯林保全上の戦略国とされてきた。

しかしながら、1997-98年に発生した深刻な経済危機や、これが引き金となったスハルト長期政権の崩壊と前後して、熱帯林を取り巻く情勢は突然急変した。違法伐採・輸出、違法農地拡大、森林火災、地域住民との軋轢問題などが各地で頻発化し、また旧政権下で発生した関連産業の債務増大問題が顕在化している。急激な社会構造の変化を伴った、国の財政危機、企業の経営悪化、住民の生活困窮に直面すると、環境保全は二の次となるというテーゼがまさに実証されている状況にある。

詳しく述べる紙面がないが、例えば、上記で述べた山地林以外の熱帯林は、スマトラ島では2005年に、ボルネオ島（カリマンタン）では2010年にほとんどがこのままでは消失するという衝撃的な今年の世銀予測が現実味を帯びており、我が国がJBICや世銀・ADB等を通じて行っている毎年の財政支援額の半分程度が、この問題で違法ないし機会利益の損失により毎年流出していることが、問題の深刻さをあらわしている。

IMF、世銀や我が国などが中心となり、インドネシアのマクロ経済・財政等への支援をコミットする第10回インドネシア支援国会合（CGI）が、この10月に東京で開催される。ここではマ

クロ経済、Good Governance 等とともに森林問題が5議題の一つとして取り上げられる。本来は経済財政を議論する場であるCGIで、森林問題が特殊な例として取り上げられたのは昨年7月の第8回会合（パリ）からで、第9回会合（ジャカルタ）を経て、今回（東京）はこの半年間の取り組みの評価が行われる。

この間の精力的な取り組みの中で、さまざまな技術プロポーザルを目にして思うことの一つは、「IT（情報革命）の威力はすさまじい」という点である。例えば、リモートエリアにある森林の状態が衛星情報によって詳細に解析できるようになり、発生している事案の現状が即時に入手できる可能性が出てきた。また、現実性の問題は残るが、気球と情報通信を組み合わせたより現場型のプロポーザルといったユニークなものも出てきている。これらを違法伐採・輸出や農地拡大、森林火災などの監視、取り締まりに利用しようというものである。

衛星情報を利用した森林調査の試行が始まったのは1990年代に入ってからで、それまでは調査間隔の長い軍管轄の航空写真に頼っていた。93年に衛星情報による全国森林調査が終了し、98年からは毎年これが更新されるようになり、さらに各種の行政情報等をオーバーレイした図面も多様になるなど、技術革新はまさに急カーブを描いている。それに加えてITである。

問題は、技術があってもそれを適応できる社会情勢にないことであるが、ツールを手にしたことは前向きに考えたい。将来の世代に禍根を残さないためにも、どんどん先を走っていつてしまう現実にはストップをかけるため、なんにでも手を出したいと考えている。

最後にもう一つ、これらの新たな技術革新が米国、欧州系の機関・企業によって進められているが、日本はどうなっているのだろう、と心配する。技術はあるがプレゼンテーションしていないということなのか、または本当に先端技術に乗り遅れはじめているのだろうか。これからは、政策等の社会科学系と先端技術は相互に欠かせない時代に入るはずである。

人生計画進行中—赤城山プロジェクト

（株）国際開発アソシエイツ 鳥山 正光

1999年は6ヶ月間を海外出張、3ヶ月間を東京、3ヶ月間を赤城山の山荘で過ごした。同じような生活をもう5年やっている。赤城まで関越高速の練馬インターから伊香保渋川インターまで103km。運転時間は品川区大井町から環7を経て約2時間強。

澄んだ空気、緑、風、早起き。薄暗いうちに鳥の鳴き声で起こされる。食事の量が東京の2倍になる。家の中ばかりにいる我家の猫は、野放しになり、目に輝きが出る。20年間花を咲かせなかったサルスベリ、藤、カリン、シャクナゲが赤城に移植した途端に元気になり3年目で満開。ゴールドクレストも野生化している。赤城ではODAプロジェクトの分析作業はしたことが無い。殆ど家の中にはいない。東京では殆どが家の中。

果物の木を87本植えた。庭木・花木71本、草花類もコンピュータで管理する。果樹は24本枯れた。自然の四季の変化をマスターするのが大変。月毎に季節情報、果物情報、植木情報、草花情報、山菜情報、野菜情報、農作業情報、行事情報がインプットされている。タラの芽、シイタケ、うど、フキ。剪定、草刈、施肥。特に、芝生に凝っている。ロンドン、パリ、ローマ、サンチャゴの種を試みた。残念ながら洋芝は全部失敗。これからは野芝と高麗芝に挑戦する。サルビアやマリーゴールドも良い。もう通路、盛土、造園等の土いじりインフラ作業は大体完了した。体力もついた。

私は、ODA関連の狭く言えば交通計画専門家、特に経済・財務分析。職場を10回かわった。54歳くらいの時に、命に限界があることに気付く。残された時間を考える。時間、階級に縛られるサラリーマンスタイルの勤務形態は、明治の殖産興業以来100年間の遺物と理解している。できれば時間、組織には縛られない方が健康的。パソコン、Eメールでいくらでも東京、外国と瞬時に連絡できる時代がスタートした。

自由時間はアイデアを生む。耕地が無くなっている。除草剤がまかれる。関越高速「赤城パークウェイ」案は、鉄道駅が地方都市を發展させたように、高速道路の活用により農村地域の中に「コミュニティタウン」を開発するアイデアである。高速道路利用者は追加料金なしにタウンに立寄れる。村役場と知恵を出し合っている。これは途上国にも適用できる。毎年小学校でODA関連の課外授業をやっている。

アメリカでは、30才代に僻地の荒野を安く購入しておき、順次庭園や山荘を造るといふ。私は実家の畑、山、借地を組合せた。すぐ前の川では、イワナ、マスが釣れる。川は800m上流の湧水で、その傍でマス養殖をしている。虫も飛ぶ。生まれ故郷だから親戚、友達がいる。新しい友達も作りやすい。東に4500円でプレーができるゴルフ場、西に200円の入場料の温泉プールと500円の村営温泉、共に5分で行ける。一般に、主婦は買物、散歩その他都会生活を上手に楽しむ。私は都市での楽しみ方が下手である。

お知らせ

1. 国際協力フェスティバル

10月7日（土）、8日（日）の両日 日比谷公園で行われる国際協力フェスティバルに s r i d 学生部が参加します。どうぞ学生部のブースにお立ち寄りください。

2. 休会

小出 晴也さん

研修員の日本観

国際協力事業団 辻岡 政男

「驚きました。日本では夏に雨が降りました」。日本から技術研修を終えて、母国の北アフリカのチュニジアへ戻ってきた友人が、そう日本の第一印象を語った。「どうして驚いたの」と聞くと、「チュニジアでは、雨は冬に降ります。夏は、毎日炎天で、雨は降りません」とのこと。

海外からの研修員はわが国の技術協力の一環として日本へ招待され、技術分野に応じて、数カ月から一年ほどの間、日本に滞在して技術研修を受ける。彼等がチュニジアに帰国後に語ってくれる日本の印象談は、二つの国の異文化ぶりを際立たせて興味深い。私が1999年末まで3年間駐在したチュニジアで元研修員から集めた話を紹介したい。

1. 日本の研修の運営について

- (1) 研修日程が、当初の計画通りきちんと進む。
- (2) 研修の世話役の人に相談事をすると、必ず次の日には返事をしてくれる。
(たとえば、資料をたのめば、忘れずにコピーをくれる。)

2. 日本の会議

- (1) 会議は、予定の時間に、全員揃ってきちんと始まる。
- (2) 出席者は肩書きの上下にとらわれずに、活発な議論をする。

3. 日本の職場

- (1) 大部屋で大勢の人が机を並べて、グループで協力しながら仕事をしている。
- (2) 仕事時間と休憩時間の区別がはっきりしている。たとえば、休憩時間が終われば、それまでにぎやかにしゃべっていた人達がおしゃべりを止めて、一斉に、真剣な表情で仕事に戻る。

4. 人間関係

- (1) 日本人は外人・日本人の分け隔てなく公平に接する。(筆者注：留学や商用でフランス滞在の経験があるチュニジア人は、しばしばフランス人から見下された辛い経験したと話す人が多い。)
- (2) 日本のスーパーマーケットでは、「お客様は王様」として接して、お客に対して、親切で、ていねい、そして勘定計算が早い。(筆者注：日本では「お客様は神様」と言うが、イスラム社会であるチュニジアでは、神様はアラーの神のみをさす言葉である。人間に対して神様と表現することはない。)

5. 日本人の車の運転マナー

- (1) 日本人は、クラクションを鳴らさずに車を静かに走らせる。
- (2) 車や歩行者が信号を厳格に守る。
- (3) 進路変更をする時、必ずウィンカーを出して合図をしている。

以上のようなことがらは、日本人にとって毎日あたりまえのように自分の周辺で見ていることがらなので、かえって私自身、聞きながら眼を開かされる思いがした。大体、研修員の人達は、ミラクルと呼ばれる日本の経済発展の経験に大変関心を持ち、そこから自国の発展のヒントを見つけようとしている。そして、日本における生活経験を通じて、日本人の仕事をする姿勢、生活習慣、さらに人間関係に注目している点は非常に興味深い。発展途上国の人達が日本から吸収するのは、専門技術について以上に、こうした日本の人間的、社会的側面の特色についてではないかと思う。